

# ポツポのおつかい



作：近藤せいけん

「うわ！ 身体の中が火事じゃ。うわ、うわ、からい、げきから。助けて！うわ！」

いたずらきつねは慌てて、にげてゆきました。

「さあ、橋を渡って、青い森に急ごう」

「お兄ちゃん、よかったね。悪いきつねは行ったし」

また二匹は元気をつけるために歌をうたいながら、歩きました。

「青い森、青い森、もうすぐだ。おじさん、おじさん、待っててね、待っててね、ポッポとクウクウがいきますよ」

「ランラン、ランラン、楽しいな、楽しいな」

青い森の入り口にさしかかりました。

たくさんのハトが木の上にはいました。歌っています。

「近くに怖い、怖い、オオカミがいるぞ、気をつけろ、気をつけろ、オオカミだよ、オオカミだよ、お腹かをへらしているぞ、気をつけろ、気をつけろ、おお怖い」

クウクウは心配になり、ポッポに話しかけました。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、ハトさんたちが教えてくれているよ。怖いオオカミがいるって。どうしょう、どうしょう」

ポッポは怖いですが、勇気を出して。

「ダイジョブ、ダイジョブ、お母さんが作ってくれた、オオカミ用のアップルパイがあるから、ダイジョブ、ダイジョブ」

といいながらまた歌を歌いながら、進みました。

「ドンマイ、ドンマイ、もうすぐだ。おじさん、おじさん、待っててね、待っててね、ポッポとクウクウがいきますよ」

「ランラ、ラン、ランラ、ラン、楽しいな、楽しいな、ドンマイ、ドンマイ、ポッポとクウクウだよ」

すると、突然。

「うるさいぞ、だれじゃ、俺さまの眠りを妨げたのは」

「そこにいるのは、誰じゃ」

大きな黒いオオカミがあらわれました。

「うわ～あ、オオカミだ。どうしょう・・・」

「おまえたちか、おれさまの眠りを妨げたのは、けしからん。とてもけしからん。プン、プン」

「なんじゃ、なんじゃ、このいい、においは、クンクン、クン」

「そのリュクサックからか・・・その怪しいにおいのもとをここに出せ。よいな～」

「はよう、はよう、出せ。出せ」

ポッポはリュクサックからアップルパイを取り出した。

「エヘン、よし、よし、どおれ～食べてしんぜよう。エヘン、ポイ、ポイ」

「いい、においじゃ、オホホ、ホホ、エヘン、ポイ、ポイ」

黒いオオカミは大きなアップルパイを一口に飲み込みました。

「うむ、まあ、まあ、じゃ。うまい」

「もっと、あるじゃろ。出せ、出せ～」

大声を出していると、少しずつお腹がふくらんできました。

「あれ、あれ～変じゃ、変じゃ、お腹がふくらんできた、ドンドン大きくなる。うわわ、わあ～大変、大変」

「どうしょう、どうしょう～」

ポッコとクウクウは歌います。

「大きくなれ、大きくなれ、お腹よふくれよ。ふくれよ。ドンドン大きくなれ、ドンドン、ドンドン。モット、モット大きくなあれ、ドンドン、ドンドン」

黒オオカミのお腹はパンパンにふくれ上がりました。

すると、風船のように浮かびはじめました。

「わあ～何だ！何だ！身体が浮かんでいる。誰か、助けて！お願い、助けて～」

黒オオカミは風になり、遠くまで飛ばされてゆきました。

「わあ、これで安心。よかった、よかった」

「さあ、行こう、グラグーおじさんの家はもうすぐだ！」

「ドンマイ、ドンマイ、もうすぐだ。おじさん、おじさん、待っててね、待っててね、ポッコとクウクウがいきますよ」

「ランラ、ラン、ランラ、ラン、楽しいな、楽しいな、ドンマイ、ドンマイ、ポッコとクウクウが着きますよ、着きますよ、」

グラグーおじさんの家が見えてきました。

ポッコとクウクウの歌声を聞いて、おじさんが庭にでできました。

「ポッコとクウクウじゃないか、よくきたね。本当によくきたね。途中、怖くなかったかい。それにしても兄弟だけで。エライ、エライ」

「おじさん、途中できつねと、怖いオオカミに出会ったの、お母さんが作ってくれた、アップルパイでやったの」

「そうか、本当にがんばったね。よし、帰りはおじさんが一緒に送るよ」

ポッコとクウクウの初めてのお使い、お母さんがおいしく焼いたアップルパイとりんごジャムを、グラグーおじさんに届け、無事終わりました。

それからのち、いたずらきつねも怖いオオカミも二度と出てこなくなりました。